源氏二十巻抄

十八

857
118

丁亥購入

ガラス使用

857-118

源氏物語抄巻第十八

目録

さわらひ

やとり木

帝國圖書館

昭和廿六・二・十五・購入
帝圖

子巌曰　以下ある寒山詩（ト）詞すへわらひてあり

蕙女曰才はあまりに乃深く学す春の事也

やかしわうにて　日の光殺しまのねさ残上ゆりけし

黒も荒さ咲けり　中にも　きそあれきえるれとも大

恋枝うしきまさ孫てうれしきとや

やかしわりぬ前に　竟夜（ゲウヤウ）別て嫌（キラフ）詞といへり

月日なりん　父母（フボ）姉（アネ）かとくまその事なり

ゆとすゑ　前の事

昇そわさと　詞とひとしく書物なるをまたと前とみ

せさるなるやまの出中にも可也

愚れとそ前　阿闍梨（アジヤリ）つみしそ川りるや恙（ツヽ）ガ嘉例（カレイ）凡むや

帝國圖書館藏

れま人は　披露状（ヒロウジヤウ）也
大事　たいりとあるやうによみしまゝと中将の心中
おとさるまほしも　白乃詩文言偽（イツハリ）をもおとさらむとす
　書始るの文よりかりとするは
この春を等　中将ふしみハ籠（カコ）をもしきそ也
当座　婦座せく眼しに合まく似（ニ）ちき詩題（ダイ）などかを継ふ
きほよく似親なしひはやうきの女帝前代みの月也
かのこゝろは　甚乃事をも綴（ツヾル）か始人は　宇治の女房前
へ通（カヨフ）人出来るは
おいもん　大裏（タイリ）にて正月よりあり　親王也口　作文あり
西宮抄ニ　此記之　江次第ニ不在記　又中絶（ゼツ）と也

あれもと　階（ハシ）下のそれまて　甚条（リ）給人は
みる人乃為　白　甚代列法（レツホウ）まく下のひちもあらぬとや
　中将ならうひ給ひさのむ気
みる人に為　中将をも花ヲして見る人ようこ陣当て致給
　のちつらりしさまく用心をつ弟とるは
そのゝこゝろ　きぬの時に琴（コト）おもし了給ひし時のるりや
人の仕うく　綴身のしる世中と名つきはくく人乃上仕人
　果為しのるうん
のひくしくそ　抽題をとりてもやし給へり宅乃をし
　きよ文也　そをうりあらす
為をそ　甚乃威の置ハあやなし　梅乃花まとうみ給ふ

やをめくおく　虚わされるゝか次第よ書たるさ萬人乃

うつくしきさと含ての引事や

世にためし　婦君と其との中は契無実なる世のためし

なれとなり

いてあまとも　其婦君と無実事をあらし僅給なり

ら又物よりむしてあん（を）しひ給人々まさるまなりし次第

くに隔なく成てのちとまり給ふなり

まりのよれあやまち　中絶の事とを其はあしくきれ

しまると婦君恨給ひしとなり

まし ひんなくや　婦君はゆきまなれとも未定まへ

仕んとといのくし謀と依称や

いはせれよりの　恋しくはきてもみよかし人待りう

いはせの杜の呼子鳥かなも　人待なりてよ云心なと

人を呼思ひ給ひそと婦君乃中君を其へゆづり給ひし

事しをも経給人まい人つてかと云なる事を引の詠そのまゝ

まると云ハ人つてなりて申し君より一夜あひ給ひし

事を経給し給ふなり

なくはめかさき　婦は事を申し君まてハなくはめのさ

それは人けてみらぬ経乃敷てまうかやうかもあり

のふとまる

おもう海さん　皇女へ申乃おもしろさん時の用云ふ

と浅なり

かしこにも　宇治なりしや
あのかたにと　いさゝかに我世を遁らん衰家や嫌しを
乃里のあたりちかくもがなし　我世を遁すして慕らん事
と思召すや　抑河面かる乃世のきゝる心なるへし
中乃琴も心とゝもくして山谷のかゝるも旬の無通（カヨヒナキ）達（キ）なれ
きてん事と此の中を白れ恨（ウラミ）給ふも理（コトハリ）となり
み縁の霞も　春霞の川をとみをてもり路を荒るゝ山里に
すみやなりける　宇治山里は春をかけるおもしろく
哀れのとこ世　都かりて生給ひけりとも古宮は焼（ヤケ）て白
へる給なんへし鷹のみをてつゝ行をむかしやと我の書世
なるの中君はさとあしやまと面白（シ）く

かきりある姉の服は三ヶ月　限あれはにや衣は捨つ哉
衣をなくなき猶を深さなるとなり
御服もあさき　父母のあとくら思召とりきたることあり法度（ハット）に
まゝは浅く思へり　似たるとや川瀬のこ出ぬる浅深縁（ヰンユ）絶（コ）也
給や一廓　母をは見給はずなり
御草御せん　除服（ヂヨブク）の稜（ニシ）乃ためなりけるとし
その後　太刀と云ふ守れるゝ　離言御説　みちきの
逢（ムカヘ）の車ゝされし陰陽（ヲンヤウ）の博士（ハカセ）なるへし
ちかなしや云・蓋　此中君　霞の衣もきつしるよ日月
れかりけるなるへし中君乃除服に成けるなりしとなる
皆人も荒れ衣より成ぬることも乃袂よりしきにもきよ

けふく　叙位　中納言乃除服のむ苦也

うつ曽掬　是者京への河人へくれ可然下用之丸

よ紀ぐ　身のき成を實とをおもそひして宮と只なり

よしく思へ里宮のめへ里もゆしきくるや老人ハ衣裳

れるすを衾ひなるゝ也し

さりうしをわくして　宇治へ宮二月六日にわたらせ給へり

七日ハ中納言乃御除服まて除服ありしはかまて見へと

のむる分へし

撰ある人にわ　婦君と宮の京へむかへ給へし給なり

あとのおかりなとを　大君もはまねいとひ給とをめさ

れさるを掬とをなり

あるものわかるゝ　白へ乃わたりし此事川の字おもしろ

さとそ云々

ありたるし　と　中納言の詞

あなめでたの人　宮乃容儀を皆々乃みるめなり

姫君を申しきこゆ

為新わしぬ　物わするゝ哉つみ給て　姫君れるゝと更ゝ思

ひ出給へり

わたらせ給ふ　白を二条院へ中君を渡し給ふべく今宮

此造給ふ三条院とちの御る也し

底ゆりの曉　させる人のいたぬ詞也

宿をとふのれし　引家果叶　宮の詞をうちきてきくして

秘中謄と此語をともむは隔なく意をえのれしやとよ

抱くとゝ也　又宇治の巻にそのわし抱きをと云儀もあり

その秘は事　中よ其の遊ひし事とある也

うくひすなと　言と色のさけけしや

春やむかし　月やあらぬ春やむかしの春ならぬ

業平ノ二条ノ后ありしにしてなり

ならはかなき詞と　又月より

はしたなけり　端也

とてあらひ　婦人のある思出給人をまたけなきん事と

思給ふむすから婦人は本くと思ひ出給ふ中しきこゆや

みる人もなき　中将　婦人のあるなるをよむ給人を

神なれしき　其　中将を婦人より比して疎みも譲

給人を　根こしある根と花也　京へ給出あらん根なりし

うつろふ音とや　伊勢　塩あしにおもる花をみるよ

思を根こしあるに風は吹もこさらん

ことはなく　言る也

給をそ中も　中く思ひうけぬまゝく尽くり成ゐをゆく

しゐてあさましき人にそくれし　弁るれとや

いとおかしくて　にくきのことゝの池乃根蓴のいと

かくそゆる猶かそなりける　弁の詞

いりふさよ　婦君はいふをよそてなく成給ひしそとや

ある人この世話　大かたの我身一は世のしらたへてのせ

そし根源かうれ
つこもりのふ　るまふ人のためとや　弁詞
ひさり尼雅　さけ尼なるへしよしのほとろまてなるを
さらあはろなり
こやひのや　かめさるむなり
のち記さ後　婦君と尼ゆもなけしなしさ念道のひままし
物まとき意の弁とてん弱てものむや
されはふる川云　弁　婦君にとくれしむをよめり不及引　云
一うれまつて　横死を罪とや
すの農まりてある事　妻ふいてるるまりあるまじきと
もりのてかくめん
かしも　さしものし可覧　ゆふましき　横死まてぶのよ
悪りきれ言をてんとある
むなしく　道理可然世ろうや
男とおれん云　涙代川ふ男とてなけたるとも思しうる
んとなり　涙川慮乃かくつと脈えてく言し気せて
ふ浮そうすれ　男とおれんのへんをも横死と教化し
て甚ハなりひたくゆまれ　哥
すゝめ　二親まて甚横孫そて色白ひとうひやうしゃ
なも別しの添るう　婦君れるけと言乃難思食と事
なとるる
人をこれ云　弁　いうきたいめる老来への用そ乱

袖の浦　出羽名所　続古今
志ほたるゝ哥　中ノ君　ことなれやそ　ことならすと
むかひて可随兊　とゝらぬと　同心や　私云
むかしうきみよる毎に業初てよりひも波にぬれぬ目う（小町）
すれ　へんの哥を目とり哥にはよると云に中ノ君は
うきて都に出行ふを弁の袖よりもことなると云也
弁をと浦山敷思ふ哥なるへし如此みて可随兊
あまそてじと　わろしの心也
ゆく人より　弁の別て姉君の事を歎なけくとや
ゆすゑ代世も　前世乃宿執（シユクシフ）のとや　君と我りのなる事
と契あん當代世よりしゝ深分なれ
わらもへ乃　色んの衆　母（バ）と子乃恋（コウ）ろやうゝなり
法ミ川のる　句
むかしなく　思ふる浮まて無念ゝ思召（ス）也
いのちながらん　出家いほく又男上もなり
あり難き法云　男をなけぬのうれしき也　引法く越
うれしき泊瀬河うれしき世にも求のれあふ瀬と
弁の尼の　心のうちにゝるとて中ノ君の足弱人也
今日ぞり　雉なれ哥に　乗車（ゼウシヤ）の人なるへし
為みしの哥　忘れ給ふも先今日をむかりとなり
いのちまも年　姉君に法かへしの　姉君の事をいふ
て嘆えくをと中ノ君よりたる心と歎（ナゲキ）給へ也

なのむまくは云　中さこ　月を山より出して山に入捨るれ

たきあとく秋も又紋暉（ユクヱ）のなきらん　名を云今日を山

より出るのさ海のうちよりいづるとなり

筆法　句に起（アヲ）みぬきこそ摘思ひなのつきしも也

三たよつき　三藐（ムジ）四株也

法車乃わと　中式の嫁娶（カシュ）の礼儀（レイギ）ありや

所のほとり　句は法山不定なるしは此比の所を大事にす

らしと世上に申すまし

摘中もられや　名の色を摘中もられや世の中とあるし

なりらは秋勢ともらん

きこてるや　其　きこてるハ　紋暉　日本紀

紋暉を　次第くの心をひてれせ　此字を次第に

暉日は日ひの心よとりる批評なるべしのさくより

てる日のおほひやうなる心也

紋暉や鳴は海にあく舟の才にも妹に霞みてしかり

万象をとりさと引にとし入られたる也　式子内親王

まかは海や霞のうちにあく舟はさかりにも春のおもかけ

ゆるられ　ゆる意と　正詞との心二也

又きどおぼく　句より六義へなり

此人額もん　中ノ兵浚漁（トギョ）敢兵をぎ延引もなきいうし

となり

おすしゆうを　夕と書とも見（キヤウタイ）也

人とも　宇治ノ姉君となり
此君は人　甚句もうきひとりすみなかりや
宇治ふかく　愚知（チシヨ）也
二条院の桜を　甚乃見やらせ給ふ人ヱ
ぬしなき宿の　浅茅原ぬしなき宿の桜花心やすくや
風にちるらん　宇治を思ひやり給へり
あくかれに　此二条ノ院のちかきをしたまふなり
あやしく　双
しちの渉む　奕
たいの御かた　中ノきミの方也
むすほれむ　甚乃気なれさる人なる色し

すれくしれ　卵ミし色たれかしや
いはむ方なくめてたしと清君の心
霞色こそ　中の清む乃備あると含て
花の香ろのこと　まく姉君と香乃もやすむをよしまし
首（ミシヒ）をまや　姉君おもしまさはとあるえ
今君もよう　中君乃君乃ゆかりのめしく嫉給ふ刻意（キサミ）の懇切（コンセツ）
とも清礼あるらん事となり
海うつまやし子　中君へ句ふ清つとさうひなり
よのためを　甚娘あさつましけなち給ましきうちとや
わりとこ句　まかふ君疑（ウタカヒ）もあまたともさまるましき意
そむ也　中ノ君のためよ疎（ソ）くなしん八悪（アシキ）るすれ

げに此給ふ光
あやしと　寄措(キヨシ)ニ中乃たゞめ懇切なる人となり
むゆるいさん　あさてゐかゝろへゆたんせんも如行とや
一かうこなしを　中君也
よの人も　甚も此給やうにうけれを婦君のゆうきみ也
つかうを又中宮と姫君の御ためと思召(ス)なる也し
うらくみ　白乃とやかくや由断(ユダン)なと此給の苦(クルシキ)とや

宿木　桑寄生(サウキセイ)　桑ニ生ス
文選ニ　寄木ト云ゝ　良ナ注ニ　世ニ如寄木ト云ゝ
寄一字をよむ　寄生(キセイ)も宿る木也　東坡　吾生如寄(カセイキ)
顕　此巻よんだるの末にのしてまうらをみしとかりて
いへり　此巻薫女三宮より女ふまでの事す並(リナラビ)ニ
あらされ竪横(シュワウ)お交(イニミル)　此巻推中(ニヰカ)の末より角総(アゲマキ)よ八ノ
宮の周忌(シウキ)の事まし年の早蕨(サワラビ)の春ふとの事
おもきて又次の年よ薨(ウ)卯月まての事あり
右大臣殿の　夕霧と竹川ノ巻にたをたり陳(テンス)られより
まへの右大臣也　薨(コウ)をうれたるへしといとも
雖ともなし　今上之右大臣今上の東宮の時気(リ)ひし

藤壺(フヂツボ)乃女御たちハ

○左大臣
- 大蔵卿
- 修理大夫
- 女御
- 女御
- 藤壺女御　今上の女二宮を生(ウミ)給(つバ)母也
　明石中宮と争(アラソヒ)給人也

中宮よりも　明石ノ中宮

女宮一所　女二ノ宮母ハ女御也

人よりさきに　明石ノ中宮より先なり

ちくれとく　左大臣　源氏ニおとらぬ程の威勢(イセイ)するれたる

後まて歎之也

さうし　侘(ワビ)しさうすなり

宮そ　女二ノ宮　なく七日過て禁中(キンチウ)へ参(リ)給人也

大蔵卿修理のかミ　藤壺　女御兄弟(キヤウダイ)

御むすめ　御門乃御むすめひとつ也

うつろひもてぞ　まさりいろひまさぬの面白(キ)也

秋を過て時ならぬ菊花うつろふ時に又の増さは

うつろふも又おかし　後されやもとや

姫宮を　女三ノ宮を源へなり

志をしはつてやせる　六条院への事ハ不思議ニ思ひしり

いまた源中納言ハ覚あさきを今ハ安(ヤスキ)と思召(ス)也

またちれ給ふしこりつれ　其宮達ハ渡見中も可除と也

りともなほ思ふ人　古注大臣ハまつと尋常の時分ならや別思

人ありてもきしふくみる事をあらぬ状とする也

給はん　甚をも本意なくてを不可許

給ひなと　藤壺まて給ふの給あひてなれともなし

中務乃みこ　今上の御子

りん給ふのみこ　証ともなし

中納言あそん　中納言を仕と奏する物也名家を云へし

中納言朝臣　勅定

あうひなとをさ給ふしとも　服者乃御局まて給ふひをする也

物となり

いくつかふ　錢有ヲ不如碁ニ　極長夜月ヲ送る八碁と云り

とらんめし出く　延喜七年正月三日御記（朝覲行幸）

大臣奏曰　還御時可除宴ヲ圍碁賭ニ物ヲ以好馬

よきのり物　賭ノリモノ　賭弓もうけ物也

女二をもとおかしめまりしや

この花一枝　御多詞　古ハ浄園中ニ花ノ美艶ヲ許ヲ折ル一枝ノ春

朗詠ニ曰　花をも賞するとても安名云一枝ゆるし

給ひとなり

れつそて下殿や下枝をれらおれつし

世乃給子の事　下むきは媛君も紳敬と見

花をもてかへる美人を収ー給ふひや

ひ乃まくならぬを禁庭(キンテイ)の心又慢(ハカン)なる也し 呉菊(ムヨキキク)
ませりあ色をなら 稍かしを母(ハ)のなす あせをと
なるへしか二といふくとゆくまを多くの作製(セイ)也
さ侮く 中宮を姉のゆつり給ひしをとするを
ひしまよの よそてのこと也 時
聖(セイ)人なとの世なり 悔をむ よう掟やとするを
名はう 女一とや
お母当なりまける 双紙
た大臣殿 又勇也 茂りむつ
六宮 ません 六条院とまた墓(リ)へとれ引めしてなり
水りる 水漫(モレテ)不通と云本文あり すさか海のおく勢り
よる中なるへし 水もらぬ中まくも下衆なる人うを
あのぬとなり
むかしもとめ 太子ふる下婿成(ムコニナル)を尚(シヤウ)と云 誌云乃婿成(ニ)と
支那(セウ)と云卑人此をも娶(シユウ)(メトル) 嫁娶(カシユ)也 猥ホ婢輩(トウハイ)也
をんなこれうしろめたれとそするを
中宮をも 明石中宮へ句のまへ披くれ猶のとなり
うへ此は世も 后位(クライ)をすへてはちんとふや
一かとふ 一方むきれ卑人をふ方下人もつとするを
このむとしれ 雲井(クモイ)と落葉(ヲチハ)と競ゆち給へを
なりひとさそ 宋定の事
ようのはむかも 其なり

十六、十四

うろりしけしとく發心也

はあせち　按使二男紅梅右大臣　竹川より右大臣以系

れあとく大納言とりひつあまりまくむすめ氏事や

されとその年　薫廿三　薫そあけまきの巻にあつまり

かのめの　薫れおうかのめのさゐく事もあるなり

それほど　らりにとこのとしより定給へり

色好ひけし　宇治大君

は物しき　浮舟うくんためるや

めうれ香　反魂香

ちれ大との　さわらびの巻乃八月れ南なる白ふと睦り

新宮の事なり

二条院のたい　中の君

ゆりて給へし　二条院へむかへられすして人給さした

れ山里よりも立出て文宇治へうつらんと思給へし

それらさま　浄命なるも必出家して大君にあり

へきちう人の心をかくわらぬ様まくるしや

こちゐく　ことくしくなり

まさるやう　懐妊と見出給ぬや

八月より　六君乃白への事

うちめしかりん　叙

めくわるさ　中君宇治よりあなたへわたるそれ後まて

あのはいかく　宮のむ候れ親のれあるはとかしきこと

へかけく隔給ふ人を
うちてなり　かねくまはたるさと人のなしえはて御子
掬と思ふそすゝめれ
めうく　文章藏なれともあるを
心ゆるされて　まめのむかし芸の大臣う　思ひのまゝ
と思召也
一時さるも　芸とかしはかち給ぬ姉君の御むすめ乃なく
かめるか中ノ器械ゆつけ給ひし掬とせや
先めしく　女くし文なるを
ねくあらき　白みとつれくや　いふ字
女のたまへるを　女のしく乃となりしも朋友の中からなら
さて文章生乃子ともも出来るを
兄ゆるなるへし　双紙
あの君もとみまし　中きみを
ちゝ川ハ　弟子おまへしめし故を事そなし芸へ中
をとゝひしるし乃御遠とも無由と遺言也
この君たち　宇治の君達
おとろへ給く　孫王かとのおちふれたるを女三宮の方に
おほく年経給へり
さもまろく　遁世なくのかゝしとけなんと思ひしを
宇治乃姫君来不物おもひするとむかしつねちかさ
と思召也

はくるゝ　おさなきを法なき花乃文なれやぬるきさ

きそうつろひけり

にのゐん　二条院　三條よりは也

さかれ　何もあまたなり

あさのまれは　大臣の事とかくり會て　もうすれ花ぞ

れとも今なれはなとをやめてん　露の消（キエ）ぬ様なとうしなひて

ある花れをうれきとなるを

とられへし　女院かうしとこはくなり思ひ知とて

山ぎはたてまのかりの色を　攅（サシ）そそのすれゆへ古婦侍

ふ法して女院花をなくしれなみて思ひ也

なとら　白法地獄るれを皆ないなとのくそへのかに也

翔ましさけふれ　一燈（トウ）をやきとと云むれ　不及詞歟

みのうしとも　ちや明くるむや

けめさゆしき　菫も白くわれかやうに成と云むにや

むもとあけ里れさめ　菫の変（ヘン）色くるす雛（ヒナ）にてあるとや

何ともいうし侍らん　女院の詞

小前おとのみくれなりし　先まていかなるはり法座を

小前のくまその沮（キウ）也

かるら人　菫不お藥（サウヤク）しかた花小菊まてまと卑下（ヒゲ）也

やすき府も白　うれも又中の志乃むゆへきれくよろし

小菫とそて尽まなり

あしこりと　あうこ　又為お通

浅ましうも　命婦か申しゝもあはれむ也

さしへ出し語の句　禅のゝ中きこえ

只これのことそ　姫君（ヒメキミ）のとなり

搆もちぬ人を　世上ハ皆搆せよなたらひとあるを

蓬莢なりのむすまでなりためし

人くしく　蓬此詞ガ上せと語也

かれし氣事も　姫君へのこの構りひせとこそましきを

中将白へゆづりし事也

これや今まあし　官位（クシイ）代望（ノゾミ）に搆思ふところも姫君に

すのもひし得るうこそふかくらんとや

あうこ　構（アカネ）の花茜（アカネ）なる搆也うつろふさ後もと前のハ上まで、

みゆるく　文の書事　書様好く　寝覚詞も面白し

よそ色そうち　蓬　露詣ふし　後苑をよそ色そみる人の

まだりとえりや　下のむハ姫君入中を蓬へ　とゆいて

語し契（チギリ）を姫君とよそ色そ中きこえとみる人へのうもそりや

とゆうひてしのくて　のかれの春れつゝり優（ユウ）なるを

家とおもぬ也

清ぬき不言　搆め（也）の花を大姫をくおく家は中君かれも

そうれ構それやうましきと也清ぬきえ家のきもぬる

は構（アカネ）の搆さるとえりや

何ふかくれる　引言不見　そのれくもあすくのしつまた

親うとする心也

秋のそら　就中断腸是秋天

さり行は　玄注中へ乃其の物語也

庭も籬も　里を荒て人ハふりし宿なれや庭も籬も秋の

のらなる

このかんの　宰相思ふかうて六条院の事しを思召てかな

しき給人て

さかの院　嵯峨におはしまして後うせ給へるなり

嵯峨天皇大覚寺より此遁世に似して書り

すのあくさま　六条院に住し人達の事也

忘草おふして　於旧したそてかとの様なり讀也

毛詩云　小萱栽萱草能忘憂　住吉岸生今称恋忘と云小草

すて裹と云々　是臣して後夕ま住給ふと也

ほのかしへ　六条院を荒ゆえに

ちりまえし　婦花

秋ゝしくて　又乃も歎も罪にも不及と有る也

萱花人故　萱と不家へ行く更乃歌詠を思えてけしや

女のうらみられを　山里を捨乃そひ為すゝまゝ世れ

思ひくまあり　世上に住ていうかりける事も

あまゝめ申悉を汁に世中と云まくと不定とや

いつかなん　自よれむものをる間山里来しあと申くこのを

くの詞

あの女日あ只里　八宮の第三年忌但又忌日の経佛（キヤウホトケ）忌
此詞にて此巻の始（ハシメ）を推寄　総角（アケマキ）の時分よりのことと
みえたり今は九月也
あゆかしと　うかゝる乃忌事
たうとれかさか　まなとへ祈念（キネン）して　つこうしまふ
揺るや　名まし又いのゝと定（サタメ）給へとや
むかへも　中ノ君
こそりぬる　絵合
りとあつましき　薫此美兄
さふらひの別当　殿上人なと云事を右京大夫よろし
右京ののゝ大夫也　禁中（キンチウ）よくを殿上一のおゝきた大臣
なとゝ侍へし　弟（ヲトヽ）と云れてよかるかや
匂まくを右京大夫家司（ケイシ）なる也
内よりやまいおまへきと　匂今日も正退出（タイシユツ）を参内（サンタイ）あらんと
薫乃此給也るすれ匂ハタつかて禁中（キンチウ）より退出あらん
とや　ましかるを又てなこへタつかさ渡御（トキヨ）あらん
とて　薫残り給へる
移こ此おもひ　中君をおもいしめをもひよや大君れむと
もやゆりて中君と匂へゆつりてのむかしとや
まこゝろうし　婦君哉ゝ給ていまし精進（シヤウシン）や
かく給ふ事ときと　世張揺ものむおくみゆるをお後
とれ給ひなりし兄付てや

ガラス使用

いとゝ世を　いとゝ世もあかし我身をなからうかくあらハ
れかゝるもの思ひみてあれく
かゝるくちをそれ　女三ノ宮出家されしや
ひんかしの　匂をハ六ノ君にあハせならんとそなり
あなかし　内へ人をさいつかされたる也
こよひまきんも　日定なりけるへし
大宅の宗　夕や　元良親王（モトヨシノミコ）ノ御哥
大宅乃月ふみ音とへ搗き聞れよそ中も色ある春かれ
女ニ　かりの宮なる兄
今すん　中ノ君へ六の事をみせしとなり
内ゝ様　六ノ君へ禁中よりすゝめとれおもしゝる
そと中君へ文をさいつかはされたる也　事行とゝのほつらん
宮中ノ君へ　御出をまたるゝなり
を語らはれ　中と　匂ふとや
語するなり　此中ノ宮匂へ参り給ふ時刻也
今いとしきを　中ノ君へ匂の経月なと給ふそといむ事
ゆへそしや
むうき物を　中代ひとへとや
世中をを思とく光　八ノ宮乃御事
お隠くき　八ノ宮姉君なとや
ひさすら　なく成給ひぬるへくかのあかしさらハ又
とひ給ふ事あらんとものめともいかくとや　死（ニハ）給ひ

たのまれしこそせんかたなきと思ひさ侍る事もあり
こよひかくまか宇治又捨て出給ふつゝ行もたくひな
きとなり
ゆくりなくすて　月みてそ猶とむかなくさまぬこそ捨
山乃葉なる猶と　いかくまてもなくゆめつくしと
中ノ君のむするを
志賀代象　推量ともとくよめるを文字治山寺推参也
松風を推さひしきとなり
山里の月　心明なり
きしかたく　山乃かひしさ忌るうやあらん
さしあくりて今のわれし花となり

月みるや　後撰第十六　月をうつくしと書といふを
いむことゝやしん人のまゐれて　独行の法しきまくかれ
き井行く月と恋といふこゝろのせぬる
大のころを月ともめてしきうこの様なは人の恋と成猶
ゆくしく　婦君なく感給らんとその弁といへり
のその心なし　ふの寺雅又名所のふく感切猶とて
君子文リ
哉てつゝゆかまん　皆りやしそとするを
ここふよう　白ふの心のそ給をと思ひつけしやとや
人まないつとせし　双情氣れ心充
いでや中納言殿　女房衆中し詞　甚へと婦君乃たれかり

ガラス使用

めしく描くとなり

にのならん　描く数わざやぎてよかに此心申しに

白去れ手しとのねく描く数なくあらそりのならんと

心苦しのさもなきとや

さやうなる心寄りひよる描く数かうるとうにもあらぬ

やらん白の心より逢たるとそいふものみるめなり

秋の夜　ぶりしともおりひとそぬむりしらりなに人

かしの秋の夜なれを

あ天の下　白の心申し去へ天下に無双とあるねくし

とそめ給ふせ当時左大臣の女なれをとられたさらん

とのあしるなり

まかしもあらす　白此心をとうけられさる女房とも

るれたるを

孫さ当なる　中此心たあすんねたきゆそまなりるそ

よりみさる心也

浮の血りもこるさ　白ふのいけも此心産のうとこ度思

只世中を先中へわくとを給へり

おあのを給ゐる　中去の孫れきのかか乃許

ならかくしまやる白　なとかくうくや也もつのしきとまら紀

らりしに乃給ふ詞なりゐし

なふのし偽部　詮ともなしを人と云詞也

かしれくしゆも　実なる方ゆも言よりまた白とや

覚もふる　中宮詞細（サイく）に物しとなり
いとよくうちなやかなる　詞よくさやかきけるの
此人ゝも下まで拝見つかうまつりしを猶とゝ也
あまたのなからふ人を　中宮は双人（ナラブ）あらしとを思ひなから
又生りて六宮の床しくおぼす（ス）とや　双紙に書まで
ならめりかしまで　されと此御心ゆ籠へ中とりかふぬとる
とる事なくして後世まで契り（リ）とのき御人ほ
きくれ給当てもかう　中宮れむ
いのち　ろうもくぬ命まつまの籠りの世としとなけくれも
たすもの也　此世まてをはくき給むみらんとや
後の契や　来世はかわれ契りをのそらしとるまてかも也
今のた添と合てなり
枕ろ鳴ひ也　ろさま海子又をうれ君を立ぬ人しまんに
くうりぬ世かりすゆつそし
日給も　中宮乃心中
こふ迷うあてを　堪忍（カンニン）も大方の時ようとなり
御をとまの　こふひの為うり中れ給むのかりきをらる
かりきをを
よのまれ　中ゝ詞
あか悲や　句詞推れまふ分とき私きふの本抜は詞とや
としえうもして　偽（イツハリ）を言（コトハ）まふくいふ芸可云物と理（コトハリ）やしこも
御ふおあてしとれさなけりかうかう乃首尾（シユビ）也

ガラス使用

ひかる源氏にても中宮よりの事なれは白河院の
おほしけるまゝなり
有とおもふとも いなせともいひはなれさらんものそ
有とおもふともをぬ世なるへけれ
よろしやう 往にはさはさなくさやたちやすくそ數行（カスキ）
絶事とある也
命のこゝろ 是うしろめ今ひみよ命あしを報やりを
別し人やそたぬと
涙つゆひ 従山乃用意もなく酔中（スイキウ）なとなりへ参りき
あきのかり 何せんまへとのみるめと思ひそんれきつ
玉藻をかりくたして
いりのほとに 中比女房衣のひ
いとくに おつきれむかしや
色たてなきさ浦ま 中の白へわさと見世給妹也
まく母の 落葉（ラクハン）宮凡内侍すけ腹（ハラ）乃と養子（ヤウシ）に也
さりしを 冬ろそまて世事をのかさりつゝいひくたれと
かくなり
女房名 いりふをとききつりれき別（隠）の心こめる兄
落葉比ををまくれみるめなり
かしとのまし のあわむ乃まゝや いつふなと也の先
ての心兄
心やをるて志をしハ 又をい人なくてあらんとの白心中

のゆ人とまてまかふ
又ふたり　双批判　争人より本對して只一人を守る
まことくし　難勝は力上そとなり
こけのる　中将乃心
かしこき　妬のことそとや
人のうへまくも　中乃力上に勝ることなり
いかめのしさ　白は心中又おもはしきそ中将心おも
ちろき筆方也　目くらし此語侍るなれは目をつふぬと
思人を山の陰にそまさる
大かたは子か　中将山里にてさうし大事に侍らんとある
いそ行かや　白きに白は将へなり
あまそつり　恵せしと言そのことなけを恋みの恨也下に
あたらつまする
はしめより　白のおはりまてを中将へ増むを世語しと也
命婦のきみそう　母も懐妊のことなく成給ひしとや
又いとつゝ　懐妊の時乃ありを罪とある
その日は　ぬる中宮御風氣　名は三千の祝言に退出也
はし車　夕と琴とや
あきらかなるのし　法度ある明也
あの琴も　琴を箏に合せうとすなひつれを夕乃心かよふ
かしけまぜ　批のことを律に可弾調律ならぬ故とや　此巻八
筆方人は心を察して書なる

を請じ　薫は六条をと称へしをなりひ給をはからひ持給ふ
をと夕のねぬしと召す也

一 はたいやり　かち井乃臺

一 かちね　三ケ夜乃餅を銀器に盛と云々

一 とこ中も　白は台盤乃ところなくして酒宴席へ持出
をそきたるを

一 此乃まへのかう／＼　宰相乃兄弟

一 かの月さくをそて　盃を持て出給へり
目つゝりきはらを　薫に白のまへく夕れとく
数をそてあつのきまんのいやなりと落し事しと思
出給へり

あれと　薫を一向みしらぬ様にをそてあし給へりと云々
かれは気色となり

一 ひんかしの　かみの出給へり

三重のかさね　女は装束を襲裳唐衣に細長をそへ女是之
物元気にはれ見をそゆるや三重のかさねの唐衣を申倍
あこめといふ入りや腰を小腰引腰也
或白或地摺或村濃に染たる也　花
うすきぬの文を裳も文くれなゐ織物をたて染手
錦は法也　あまちめありと云ふなにかゝし巻元

一 かはぐどねり

西宮抄　院宮雑事ノ中ニ院侍男勤ニ舎人ヲ召継奏時云々

今案親王家又ハ召継或ハ御室明親王嫁娶（カシユ）之時召継以
下綾二疋を禄（ロク）に給ふ由上代記にみえたり白ふ文乃御
事も見ゆなすらふへし又知足院禅閤（ゼンカウ）院氏御記子やゝ
て召継と見せし事もあり也　とゝ里とも御厩舎人
なと兄　又位六位の次この者ハ一のかしら給へり
おさやかれたね　さ程もなき人なを
り色かえて打装て　装と依様して給はえて此事なり
中門とりかゝるの所（テイ）　装給ふるうをみえ給ふも
表を入て出し　装三条へ給て女の産装此事もとおもひ
やりてなり
肉にふか　白をしきてを肉裏（リ）へもちゐまかしや

源中納言　白装となりゑて云ハ是の覚とも也
あつめ紀ふる　のかゝるの卑下（ヒゲ）
うらの涙にしき　蔽深かり女御
此くりと猶すく　澄中も今むうつらぬなり
いのおそこ慰　世語大君ハ似たりけるを
あせちのきみとそ　此かれも人也
おわうし哥　うしあへてかとのむろうや
又打わうしを大かとさなとのむ兄　関川おさか乃関の小
川　おさか乃せきの小川といちんためなや　よふゆ
あしす紀とも関乃縁兄拠ふかく給ふふを思ひてなり
世上と憚（ハヽカリ）給ふにやうなるにと也　見訓（ミナレ）　多別（円）

海仙らく 箋 いつれも此所 あさくらうへやみ
桜花開は乃下の匂ひを絶る物から 元良親王
おほゆらんかし 双紙
海ことをあめの中 箋詞
あのさんとまゝ とよせてふるゑ也
さしもあそひし文 かのかれの詞
世後うむき 此二人箋をみるたらふりとおつまる也
宮ハ女君 六君とむかふみきあかしたきわり
かこれ侍るをも 以下あのぬ所ふしとるを
をたちふ
かとくさけ也 一のことあるとき心ありや

このころぞ 好殺 よの給はすと云心か
うしハ好色してと云心や
松のし南の 六条院の内 元共の結縁ひしあたるへし
一日の御事也 八宮乃弟と面宇治にて箋の此のめし
くめされさる事を侍さり乃中ふ続紀給ひしとや
此るは心れ名誉 箋の松もしまさきをいのふいりと知し
かうんと御訪のくし云中人あらしとするを
さりぬ人もへ 伝次あらし見て集ますや度との文乃詞
伝の曲り うき経ぬ 文言
日ともひそ ひとつまたちふるさ海まそ句 八宮乃伝す
前まく仏経年との事なてましとなり

ガラス使用

ことはりにしのひ　別（ベチ）して大宮八宮の事をおもさひ中にハ
中の君は猶おりひのまはなれとも大人達（タチ）も魂（タマシヒ）れ歎（ナゲキ）あ
らんとおもひにはかりなひとまや　ここにまさひ又法事成
もせしとなり
さ思ひ給ふにやう　中君宇治へ法事まて法事なとし
法師事不可然ととかりに法はかるれも甚おて法事
さしとや　此只可見　ころかひよくらん句
尼君との給をせ　かやう此むさしを中君へ乃むかし
なる成うれと昔乃むかしとの御に委曲（キヨク）とや
丁子染　のこかりの扇（アフキ）なる色
さてあつましきを　双紙のよわりめなり

思ひくらふるに　共に甚しと也
つねよき色たて　数珠（ツ子）を隔（ヘタテ）あまたとも前に立給をぬ樹かれとも
かなふかきや也　おほかなる色まてむかしの句を可切
わきとめしまてをふけ逢花佛文言よこけりくとある詞
のゆるしに此よ給ことひかやうて可然をとなり
定めさらせ　句法花乃時かくを憚（ハヽカリ）侍りやはと云詞をあし
くやハさいりけんとおもてとなり
年比　進来や逝さる志ものとや
一日うれしく　忌日の法事也
むかしをりけれなりつる　法事の法執着（シウチヤク）もふかくと本元給
しそらまとなり

ガラス使用

いと寒も　其詞
世やを　世やはうきえ人やをつくりきあま乃かる藻にすむし
一　虫乃われからうらみ
まありもたのひめ　心のろく歩のたのひめと交れおは
しめさんと也
次ぐふ文の次心ふふあしかくてすをとる事
指ふも　とりう色を指はものれや世中をあらしなきう
の被分これもさん
次てもつけはりり　人語らんとする事しきらんを詞と
妙弟語へ事
よのゆるしけこ　白へ中てことく数ハよの語へ事
むりしおりひ　婦系（アラソヒ）乃茶似なる也
わらすや思ひて　の行ふ事をあらすやなり
中系の宮指へ思ひてよのるへしとの語ふをと其れ思て
と云詞うたとひうら語へ事
これは其の　其也
くやしき中も　たゞりは人此ともねもほかうかうすく
やしきにうう事を分のれけ也　其意よりる文語へ事
いとおしきや　双地
まろひ指のうまで双　人めれのうる指かくさつたなり
あしれさるし　嬛姪（クハイニシ）乃きざし九常（シビ）也
それこのかしれ　妬不る乃ひさある心さまなるまでをや

ものゝしさを　かしこく観念（クハンネン）する中にも此しものゝ事を云也

よろつをきれいなる　何も歎也

いてうつり不給　筈も少もあひつれ世を云実事なり

しのふの乱れやと　婦道の中にも此をしとや

ことわりもしりぬ　引不及

ゆきうきもかなし　男（ヲトコ）と云相皆双此

いとめくるしき　婦道より今中のうちに苦（クルシキ）となり

よのつねに　めかろなり

ある事に従て　念（ナキ）の限（カギリ）をもとくあしくして喜（ヨロコ）をもてあそぶへし

しゝとするを

打とけぬ　六気の所也

めくるしとよ云　男を謗も云（コトバ）よるへくもなり

あなかちなるにほる　甚此事

あまたゝも　甚もいやなるを白と行衆のまんと思召（ス）也

ひさしくさし　白ふ乃うとくしくしたる事うかれ乃様ら

ひ違へて　白此と経（ヘ）と苦（クル）しきとむしなと世治人也

そのうちの人は　好色（カウショク）の為老（三千年）家事はいつも其をすゝ

しほ入り

おのれも　我身あしくと白の事にして乃治人也

思ひ定ゆる　前に位（クライ）中も清き治ては白（キサキ）世中悪忠召（オボシメス）退

よれよりものとし　人それを疑（列ヒ）よするも不匡此不めつれ

なきさとも　何の生此まん　此哥此も八人の人の訓（ヒ）

すそ擬こ庭を擬を人よりもさまにのそらんとよむ云也
行やうに思きもく人にしらすと也　白の女代叙のれなり
薫物の心哉うつし給へると云心なれへし
まゐらへくも　双甲も　不似書とや
又人よ云　白ふむをぬなり
見すれぬる云　嵜（ツチ）そ恩訓（ミナレ）　弖や方兄　大やうなる斎
はやのこしそそとりわや薫うり抱海まさるとそこはかなれ
ふの方うり引さる中しろ我をとらんとやとなり
のえめり香（カ）をもさせると
めてまはみりし　中君の見事しけに薫心と思（ソゲ）しろとや
まちすれ　中君乃御を合君のめつるまよりみられさる沙
なれともむさし深（フカ）あやしくとりこるすへのきつりしたさ
そしきもさなしみくめてなり
めるぬうりをよ　薫の麝（ラツ）香（カ）にて一きわ中ノ君にまかひ
うひさるとや
けくりくすとまん　兄弟（キャウダイ）なるぬ人乃おきく計りひよう
をさくまんあくしとなり
みつしこがうひけ　御厨子（ミツシ）　小唐櫃（コカラヒツ）
まへくまりの心をのよとすす文やあるとなり
うのん　薫　心あいしん女そくてゐあるしやとや
むん　中ノ君乃女房衆也
うしろやすく　中と句との中もり未ん数と称もひし

擣ととまし

あもゆへと六君にむかひまてぬの祝着(シウチヤク)と思ふ故佗

しめきむれ

ちゝ宮　女三へ也

まくん月　かかる道心ふかくみえて八講(カウ)なとせさせ給し

事あるさやうの法事九月なとにはもし給ふへ云々

事しまや　非説(ス)法師(ニ)説事也

ことりかれ御まうけ　中宮のためなり

もの法れう　薫乃ためれ也

あし乃日とも　引腰(ヒキコシ)一襲(ツカサネ)もうれに交(マジリ)てあるり襷れ帯(タヒ)の摺

かる摺也　常れあるきてん掛れ死　志かも是常と也

けふうむを含(フクム)

ひをひきる事　白と中との契姉のまても是常まてもちゝれ

たるを六君へ給ふと一筋(スヂ)不恨(ウラミ)給ふことゆきあくれ

かゝるの事也

れまくちりく　女童(ワラハ)や

あちきなん　心やりれらぬなり

まとりつきなり　白きうすく人ゝりあつめられ給へ

ちもくの事不云(イハ)給也

荒れ君　薫乃事中宮のためあまりのなる人あれは也

嘆白ふとありへし

いそやりしまかふれ事試いくり

あの君しのひ奥（オク）にあまたを白　さあらむ時ハ中将つらし
あらめてて心ゆるさぬの分別もあるへしめしつかふ哉
へ大事なると云心也
中くなる　中く山陰らんのとなり
世にひゝき　六君のあつかひなり
宮のうち　六君乃花やかさをおりひやりて中将をかれ女
房詞れ心となり
きやうりん　うときえへりて詞摘（シツ）意れハらく
しかとのとや
ことくしきをさてわさとめかれてそ中くと思ひて
何となくめさるゝなり
あの君しらう　篇句に中もをとらぬ花やのさそとある也
むれたるを　大かたの人をも対中ももすへしとや
なみての　八字
いとをしれ　よく世上と篇り無せんとて八字乃なり
いし得ひしをいとおしきなりしやゝや　双紙
ほくらしき　新字　ミをてまをしなり
新叅者り　中将心をきゝ詞人里
このるさいと　白のうつろふ心より意ハ好色（カウシヨク）とや
やまいたらし　篇の須出へ中将より此詞并し詞入り
くすしさとの　かかれをさおりひなしての詞人とあるを
ひとよも摘乃帝紀　先目此段の事くと云ゝさる女房詞や

おなけきてぬかをとり　のかれぬ世なとを流人り
かやそりしぬ　かかるの心中　水鳥乃下やすからぬ
思ひよそあくまのゐもとからさらん
人りまとひ　嫉妬（スヰニシ）乃事也と　薫れく流人ま
ものしりん　妬気（ネタマキニ）かのくらねそうとなり
猪も子も世のうくも世の思ひ心うしられをぬたされ
もちとも世の松なけくなくに
ゆともくるしき　かかるの心
めしよをさる人乃さうんも流くまれを　出ねのきけ花
流くこ総そてくるりとてとき事也とをまきらわし
たすぬるり

うらみて　中の心すハ心地乃もり　獄に好色成るの
めりして松もてむきさる宇治のまとや流人ま
きこぬらま　八宮子との好楽さと忘られと出ぬ家井たらま
りくしあるまま　薫の詞
されへき又ますや　嵩首銃（カウシユクトウ）りや婦（フ）のうとく数ましやや
ほかりの礼ひしま　婦人故に薫乃出家せとれるに障（サハリ）さる
となり
あまりの中ものしとはら　婦乃浮心より似さるもあるそ
達（タツスル）ゆ人好色成らると云ま
むの引きと　むの引の以さ成むのあか中も但（ヘカ）さうしとなり
うしろめ白く　中詞　赤実ありうる人のみとのむりる海

てのあはれをもしりとなり
今こそはあり　中の君へは文なとをこしたるを
いとゝしき事　宇治へは此用にかゝる御文もありつれ
うれしと隠すと思給のとや　名残のすまゐも荒し心底とは
浅しとあさくのあはれはまや
かくして　山里への御用にたのみしめし給てかう
思給つれとなり
山乃かこを　庭は山也
あさきらに　ふしつのゝきらにふる世なりをそこにかう
おもと志ぬかくなけのあはれし
そともゝし　志佗ぬ事をたにかなのむあたてゝ何くなる
らんことなしれとも　甚乃中にかやうにことなしの實
よりて墨染と宇治の残りのよそへ給へり涙を
墨と云々
むかしおぼゆる人かた　その人のかたちをみとりにつくる也
白氏文集曰　香炉峰北有寺号遺愛寺仏寺者高宗皇帝
有寵愛王子至七歳忽薨不堪哀傷建立堂舎王子形安置
其寺　草堂記
畫圖　漢武帝初喪李夫人李夫人甘泉殿
裏令寫真丹青畫出竟何益　不言不笑愁殺君
周刻木像武帝以董仲君　李夫人貌以温石
うたてみたらし川　恋せしとみたらし川にせし禊
神はうけすもなりにけるかな　中君乃詞

非をうしなふも佛道（ブツダウ）ニ非為（ヒシ）ハ善へしたゝむ也

よこさまの詞可然　後（ノチナカ）涙をと云すんあらすとする也

逍遙院殿御新注　みたらし川ふなかる人形（カタ）をし作（ツクル）描

されさりなから道心のかたすゝむる善へ引れ非を

なかる捨ことなり

こかねもとむる　毛延寿（モウエンシユ）王昭君（ワウセウクン）を画（ヱカキ）タル　業若昭君（セウクン）貧（ヒン）ニ

そうまうしめ金ニよりてよくも悪も書なしゝるよや

さ程れ繪（ヱ）のよく之婦君のことくゝよ不似をもいのしわる

むかしろめ多くそを君子をすを恋ニ亢とや

うよそれ　蒙詔畫士もうれりしるれとも忘明さたそり

れことくなり

蒐ふかせよる　神變（シンヘン）れるハ古事ハ不遑（タクカ）ニ及引

人うこ乃つ丹てに　浮舟（ウキフネ）の事ハ云出んとて人形（カタ）此次と

いへり　浮舟を其の人形ゆとあるよゑせて中ノ君乃報

此のまんとのむなる也し

思ひうゝましれ　和かしめしよ浮かまうしき事をおもひ

出たるとや

馬出たつま　中かうニへ馬来りる皇中ノ君の浮舟ハ浮舟

の母乃ためふれをや　ひたちの受領（ニユリヤウ）よつれて下て二

源城友しゝる也し

うとみよ我と　中ノ君を姉（アネ）な似よると其乃中ノ浮ふをと思はれ

旅ヲ更（サラ）にわまえ似をと云にしもあ浮まうしき別腹（ハツフク）の浮舟

ガラス使用

の婦侍に似ざると云也

芙蓉のさまのくまで　中宮の人のにほひとりふも劣のう

うつくしと也　芙蓉を要と云　一説あり

さ義へ又　めでたき詞

さやう中も　花鳥をよそふむかひはあらめと也

いはや　中詞

あさゆふともあて　大君中きこえ人乃ほりまへんこと

を八文の世治て　なからん迄まそうろうめたく思召し

る又と今は　中の君ひとりの身あつめくせ出給ふなり

又兄弟(キヤウダイ)なきと云ても　いひてもいのくとてさまてむつひ

絶もねとなり

なしきみるに　かけるの中乃第一ときとみて　八文要くの

落胤腹(ラクインハラ)と推量(スイリヤウ)也

其の子共　むまをひそくらこえれ子ふおなろもをよし何ふ

悪の葉をと侍さまし

まも知りまでそ句　このふまくを無由りひそてさせ給

へ　委安度(クハシクキタキ)とや

むとうり　あおつをやりて　むとゝうりせんとなり

よ哉うる人中に　方士　又旁求(カタハラモトム)四虚(キヨ)上下東極絶天海(ニワタリ)跨(ヲアフ)

蓬壺(ホウコニ)見最高仙山(ルニイトモ)　多樓閣(シロウカク)西廂下(ノ)有洞戸東嚮闔(ニムカツテトツ)其門署(シルシテ)

曰(ヘリ)玉妃太真院(ト)　長恨歌伝　陳鴻

かくれまても　人顔まてなくはめめ人きまそめしられ

せもとなり
なくさめかたさに　人形まても成たると思ふに浮舟を可給あ
らんとなり
いかしへれ　八宗乃法子ふ子もめされもしてきしとや
急くゐ　變化（ヘンゲ）とよむへし
おのうるましうしすや　おのうふみしおろうやれま
ひとかた可給人形（カタチ）とや
佛になりん　薫乃山里のおするふとの給ふはてゝの詞
ちるゆかむと　中君のわりうかされむきれのまんため
とてこの給人とも氣なるゝと薫れむや
わくましき　実事（ジツジ）しをまちし気るゝと中の思ひける
おぼつかなくてをそてはかなく損なかりぬをみえ給り人れ
とむとれめれにやゆきの思ひ乃ゆかき薫れむと中
れ人を給りるとなり
ましじきる　潤綵（チウレン）の心気
ふさるその給人れ　浮舟也
ゆをうさしれきそ　さ給乃人なりねを伊ひよりてそうれ
そんとや　ゆていうてうし殊（ミコト）しくをみろへ気給くむ
をと絵て可見ゆれうや
人乃かい　婦君（アネキミ）ま不知けくむをそくまぬ也
ゆとりしこけきと　猶あしそいかゝるれと舟の姿（スカタ）れそ
ろしくれてとの人也

つのくになるめ　薫の詞
いれらんまて　大君又中ノ君の事まく悔とおほし
　めまとし弁の心也
枕此風　秋婦しくものなる女の風情を見はしむつり
人れ事しとみ
けふうの　中ノ君の六ノ君故に猶おもひまよ八ノ宮乃歎又
　大君乃歎もとも弁の思ひめくしするとるま
なつらふまは　みなともすり世上のなをひとや
れ引しうとなん　大君乃中ノきみのるをおほしま
　あんとなり
つのあやまち　中ノ君を孤独にまもぬ事誤りしや
いたの清あらさ海　句ふと中ノ君との中なるま
何の不可説事もあまみとや　くひても不叶るやうや
六ノ君との事も又世乃なりひとなり
句の中ノ君はうり守護なんるりまでも御しされと
中ノきミ忘こひうらぬとや
いひてもく　面白詞也
すの忌日　大君ノ一回
ときわれんへく　八ノ宮の法心に姫君達の為もて来る
事一頭をすとなり
は宮の清まやう　兵の御領うなるらんとや
城に上ま　あつまんとも　とかん頭人ま

ガラス使用

志んてんとは　志んてんをば寺へ寄進して別に殿なとた
てんとなり
むかしおもと　觀音勢至因緣に　梵人乃子まておもしけ
るに継母のためにころされそれをおやのかの国城
くひかけて済界に佛道に入給と經文にあり
ころされける時りと乃母の屍なるへき也
たいくしけん　不可說となり
のちの世乃　善根となり
佛乃をしへ　寺のかたへ成撥りとなるは
あのたひなるは　寝殿をとなり
めけらしく　搆れ今その時薫をと見度と思召しやけり
みたてまつり　薫をと弁のみるや
まうり　中に宮よりなるは
こめかしく　大将にはとすくなにゑんのかさる給れり
しかりたるを大君乃御や
宮れ浮りて　中きを
むゆるさらん　うと成人なとみをもくく志うあん
しゝひ給ふ人れむとやかめくのむや
思ひくるへ　大君と申し君となるは
京よ以よう　浮舟京に今ありとも不云と弁の申しなるは
中の君　うち帝の国乃母
うとまく給へ　浮子をかへなくなきと也

弁も　中宮乃御れたゞまは浮舟のなくなりぬれをへん

もはやまぬとなり

宰より大輔の　浮舟が女房也

あや　此書てあの巻〳〵そさやうとよむなり

こぶふ　木蜩（コダニ）　木に付る小虫なりや

うんハほうけきれ様也　蔦（ツタ）と云一義あり

宿り木と云　蔦やとり付る所と聞もあすハ一説も

あはれさうらんとや茎そ一生葉寄生するによりて

あゝすそ一説もさひしものらんとなり

あまたゝける所　弁　此処所を蔦やとり給ひしてのむや

いとく家乃　宰相乃くれとよ処さて宇治なれを

いとくしと面白書やうるさま

おとそあるる白　よくもりうや　白乃心

さやあらつらん　双紙

わもし　中ノ宮の白をみとや

みじやとて　白のみをせしとるさま

山里　中宮の事　文詞

岩打の　りのな　ん岩打の中にも露をのハ世のうき事

なきみそこゆらん　又立の色り侍所ありせんとやそ

乞ちるを程経へりらんとや

増よりこゝふ　ことまよりもくれるさま　秋めく乃草の

袂の花露かまをてまのく袖と云らん

かゝいそぬ事　世中ノ憂れかるは出家して心に堪離けりひ

れあるとてんしての事也　志のすゝみえかるは出ぬ堪

されを悪ふ薄と云一段尤まゝやらん意よりまさるゝくむ也

又意をこなさとよりまさる様くと云心尤られは不及尤

ゆりいてぬへれ　中宮の脇足よりゐのしつまて弄をさし

出給人里　懐妊の故

秋を待る事　中宮　秋は事さびしくも思ふるよしやかなは

出さく給はいよ／＼く云るとなり

わか為　大方の秋わうしと川乃虫りに家へての世をも

振捨るかれ　中宮の涙を恥て扇をとてかくし給へり

心のうちも可然様と推量也　奏事しをかしと思ひ

なりけるかむすきは意乃も思ひ捨かたくこしと也

うつろひをてふ　名花の時かはあるへし

わさと時くろひ　ちやくさけと時くろひ給ふかあやに

くはせそてきとなり

花乃なかのに　不是花中偏愛菊　此花開盡更無花　元稹

まれりしのみゝ　西宮左府諸子なれを文なりと称ともみ

ことゝ云ゝ　此花開後　後の字を盡と作者のかきなと云

しとや盡字ゑるる心尤　西宮左大臣庭前霊物降誦謝

上総前掾小児孫此詩義作者之本意盡字為誤琵琶撥抄

半曲小児醒　唐廉承武之霊也

撥上元石上流泉曲三曲を授けるとゝ云ゝ

ガラス使用

大人の　孫覚相経にありし人と云を廉承武の霊となり
浄しとめしとき　琵琶也　琴を絃の趣名也
むかう　中宮詞　手ハ昔の掟にありしんと也　むかしあさ
く成たるの才覚を世のおほかたに伝受する事打まきてなくての
一　とて曲を承しく忘るゝを
おもしろう　八宮なとへ明たつ時もありとなり
のちかりの事　琴をもとをそ也
わろかるを　六ノ宮
それ中納言　薫　その宮に　かゝるを
いせの海　律は言　盤渉調も律也　平調にのまなる人
うちす　花　琵琶　黄鐘調也　絃と箏乃こととをんさ
きてうのしらへ　かたのゆかひてあさやかにきこゆめくる
給ふ黄鐘調に合するすや　うたひ給　催馬楽
伊勢の海やきよきなきさのしほかひになのりそやつ
まんかひやひろはん玉やひろはん
此院　二条院
院のうち　中ノ宮
年も暮ぬ　此巻まて二十年くれぬるにや　薫女三宮廿
蕨巻乃年迄て次の年ゟ成ぬ
子やうみ給ふ　去年五月より懐妊あれを二月にあたる
かくて三とせ　中宮へ白画給ひしより三年や
一所れ　自乃ミ元　中宮将とこうりさまなけのつゝしまると

ガラス使用

女二の宮うけて沙汰（サタ）あるへしとも藤壺（フヂツボ）の御厨子所

定しなり

御うしろミ　後見（ウシロミ）する人の事く天子の一の人

新ふ成こしく叙とあつ

つくも所　柏の如さりなくする也

さまやう　國くのまつりくする事ㇾ御さなり

月のまうめ　其女二へ也

まつれこしまれて　宮治のゆかりへをむひく也

此所るりを中宮乃事ㇾ上克

おとしうのところ　壷捐　縣召（アガタメシ）或ハ京官（キヤウクワン）乃除目（ヂモク）以後執筆（シユヒツ）

壷捐（ナフレモ）とやしりや或除目以後三月経てもあり也度

除目參著（サンチヤク）事ㇾ示とをとも放壷捐と云りや除目来落（ラク）

去（キヨセ）る此事と書へゆく也　末代断絶（タンセツ）と云く

右乃打母ねとかくたすて　右大臣ハ　紅梅（コウバイ）なりうれ大ね

うきめ人て　左大將を辞（ジ）めふ不へ右大ね悟（オン）して兼右

大ね乃大納言する條めへて源氏をとは大りくは相續る

左とあく　右のあそぬとのと云

あの宮中も　白ふへ拜賀（ハイガ）也

なりのたゝ　宮を語くうそ猶変ありけ今そ禁中（キンチウ）しまて也

答拜（タウハイ）や亭主（テイシユ）も南階（ナンカイ）よりくるつまてに札あるむ乳揖讓（ユウジヤウ）の

作法（サホウ）也　新大納言の拜賀する　其そ　束帯（ソクタイ）　白の直衣（ナフシ）下

のさ拵めけらしきん

はうきの人く　大将に任れ時その外さ乃中少将以下をと
請（シヤウ）して大饗（タイキヤウ）の事をと行て禄（ロク）を纏白を饗所へ請しやり
されくふ中宮乃おまへりことをきてたはふまても
こなくまくなりを近衛将監（コンエノシヤウゲン）まて請待（シヤウタイ）ありはるしの所をも
饗所也
右大臣とはく　夕霧の大饗の例（レイ）まく甚の大将乃はうさ
の縁をと六条院まてしおくり
ゑんがのみこなり　中少将へなん也　ゑんりの子を親
王乙卿請陪（シヤウハン）人の心元　堪下りとあまりしやも云神楽（カンラ）子
とやまゑんりの楽（ガク）人とてまた也
とやうへくも　八宮の夕霧うとくるまじくこれとも時
をもさるとてるを
宮乃わさくし　白かなり
みでのせうり　うみ座まて碁（ゴ）をうちけ細れ残（サン）紙乃
器（ウツハモノ）なる名也　わ碁中も碁盤（ゴハン）を必（カナラス）をしをりとなり
ぷずく　粉熟（フスク）又穀（コク）をまぜてをさとりて粉にして餅（モチ）に
まうしてゆでく耳葛をあまてこ丸まるくしてきりさき竹
のはくをして其中へいくくをしかてたへしとなそい
さ井して雙（スゴク）双六乃調度（テウド）のあとく悔るゆやうつりの
物語まかせて　衝重（ツイカサネ）
宮のたいふ　中宮乃大夫
宮のはじめく　左門より白れ沸字初てあれをとてなり

御こけりる　中納言　是より双紙

まかくし　迷し

御門乃御むこと　嵯峨（サガノ）皇女潔姫（キヨヒメ）ニ遇ニ忠仁公ニ　宇多（ウダノ）皇女

源朝臣順子ニ通ニ貞信公ニ　延喜次女にして御位なくましく

皇統時ゆつり給へり

左大臣殿も世上人は云る夕もと云てはなそや

こゆんふ　源氏乃事

我そまして　落葉（オチハノ）宮と也

宮そけふと　落葉宮

大蔵卿　蔵司官　女二宮のおちなるら

うのはゝ　女二の御さへ家司（ケイシ）なとより成しんなり

思やりふしてはその也　是は車なひなと縁なるへし

おわすれりくさ　守治姫君（ヒメギミ）

おそしまず　女三は御産の殿とや　又去古承をうけ

なのらんとてあくらしく絶て今乃殿なりし西おもて

乃方へ　女三をうつろちんとるを

むのやゝそおすこと　平人未同と也

は文乎も　女三へは文あり

宮の五の君　白乃御子　延生（タンシヤウ）　又十日めり儀式あり

百日をとしりくのと云

むの予しまや　是太ねし成給ひて一きかれもく数

とや　中納言女房乃なんるめかりるをし

国立国会図書館　タイトル『源氏物語抄 20巻』 請求記号 857-118　ガラス使用

中宮の心を今ハいふ也

あいだちなく ことはかなる事なり

いとあるまじき　中宮詞

おなじゆかりなれと心のうちも　大宮と宮の今めく時分さ

へ宮給をぬすみてなり

おとげそてぞ　姉君（アネキミ）ハお姉宮（トケ）をさへりし心のうさうとや

かゝなることと　此の宮をめれとの御出さるゝ事一位

たくひるまじき事なれハとや

宮の御内まて　中宮姫宮なれと宮の子まてあはれん御心と

とや　かれと姉君の御子をてしめ給をほくとるを

おさまさん なき　双帋をまちもちらうたへ宮也

宮の矣（ヨキ）なりの御めをそみて内門乃内蠶（ムコ）にてなしかと作若妻を

おもつれを　わつきをは神よりかへ物のまれあらしや

あくろう寓のなく

まつらうつる　うかおのうつらうおろきこゝろおもを

藤もぶ　四月の節（セツ）小不成時とや

藤の花のえん　西宮抄云　天暦三年四月十二日於飛香舎（キヤウシヤ）の藤花宴（ノエン）飛季（ニリアシ）

あるじの宮　藤壺（フヂツボ）よりまかくハ为し　みのとのあるを

おのれとく　夕めせち　遊ともなし

藤中納言　藤壺（ヒケクロシ）子息（ソク）

三宮　白也　ひさうを閉給ふ

こうらうてん　打廊（コシラウ）　後涼殿（コウラウデン）なるへしと云也

めくそ　墨尻

宮の御はらより　女二人ある也

さもの上　兵部卿宮のむすめと夕霧をうけ給ひし人也

天暦三年の孫にての女御安子（アンシ）八九条右丞相（サウシヤウ）殿の御女（ムスメ）也

延喜の御門の御女勤子（キンシ）内親王を則九条殿室（シツ）に成給ふ人也

是によりて延喜の御門の勤子内親王にたまはらせ給へる

箏譜（シヤウフ）とまうし給ひしをと今物語にも六条院の女三宮に

まうし給ひし琴（コト）の譜（フ）の書をたまはり又式部卿の息（ソク）安子中宮

号藤壷（ツホ）なり給て村上乃御宮へまゐらしと云々

笛ふきの音に　指木乃笛（カルハキ）（フエ）　甚を出給へり

白うきぬやうぎ　浪揚器　決揉（ケツカウ）と重（ジウ）しらるゝ也

れいくしきりて　夕の天盃（テンハイ）と御盃（ハイ）を給はるなと辞（ジ）し申く

也　家宴を給はるれそまうす也　甚に由川里給へる

とて　不当事　表と云也　いせう乃事しと云て

唯稱（セウ）

めしのてし　御盃（ゴンサカヅキ）よそり色てとよよるそ　天盃とし懐（フトコロ）

めして退出（タイシユツ）也それをさしめすと云也

縫なり　王盃は後舞踏（ブタウ）あり

めきらあまた　官位次第也

何せちの大納言　取揚まて可謂知其旨云々

昌如此書也　又撫可院と称る院歟御説

又よく證ともすれと　呼がる之

あの宮乃母女御　藤壺（フヂツボ）女御　女二宮母が　あせちの大納

言のむすめのまし事也又大臣の家におほせし時威てし

人しそけ小　甚と名付る人なれをかり

えそいはんや　宴（エン）也

文だいかざる事を　式以下ことくしけまとも云

さためられる間不出と双や

めこの町　二の町より対（タイ）しての

すくらべと云　甚也　そよえぬ枝を上り枝よりや下乃む

そ女二也　の所しとをて参る藤壺をいくり

萬代と爲し　御製（ゴセイ）　飛香舎（ヒキヤウシヤ）藤宴（エン）に　延喜の御製

かくてこそみまくほしけれ万代をかけてにほへる藤

なミ乃花

君のため云　季継若　ほかにかさねつとひむちまとあ所

首尾（シユビ）に継若あしそ所して也　延喜の治時　菅人菅原

國章（クニノリ）　藤花宴乃うちゆへ坐れ雲ゆしのさうあやまさ

れける

其の所にれ云　継若同前甚乃事しとよめり　かめさる

おもむきまてあまりなりと云むるやさらなりし継若

推量（スイリヤウ）と也

ひのことなも　云の趣（アキ）と業若れ卑下（ヒゲ）

ガラス使用

あせちも　義まて紅梅亮但別人と呼ふ之いへく

はせちうせちも

かなうろはとくり　女二の御道中と皆をまくと云心也

ひさしの御車　庇（ヒサシ）御車糸毛（イトゲ）也

こがねつくり　あかゝね金乃うれ揃也

びらうげ　糸毛也

おり給ふ所　下くなり

はむかへのくるし車　かねてまうける

あんない　案内也　今も案内と云心也

造りかくらる　先寺へ御出ありて弁の尼（アマ）のあたりまで見給

へしんでんのむかしとるまゝと也

女車　浮舟（ウキフネ）なり

下人のす多（キ）とよのかし人かしてゐる

がやく　かしましき心也

ゆがうご　詳無二無二也　ぜんじ希目

れいや　領状（リヤウジヤウ）　ようはうと　中気の経ならひし事なり

ろしぷげ

あのしんでんを　寺へ寄進（キシン）の趣に造（ツクリ）かへて堂宇に成へし

はるのはまでを　猶也

れつぞで　はやくも聞えぬ也

ゆめかたれ人　の弁尼そ甚（ジ）人とおゆめく　いひそへたなり

ごぜん　御前は浮舟より同車乃浮舟（ウキフネ）乃母常陸めやすきめ也

いふ事　浮舟の詞也
御の使なるなり　侍の云詞
車をたつゝく　女の車よりおくれまん車にまいりくるり
打板と云物を並てわたすや　家をさかいの物まうち
あるまじき辞なる也し
並てあそて　人しれをおはそ拝さるまじ
こよかうき　縁（ヘリ）乃紅（クレナイ）八裏乃なり
わかな人　若苗色（ワカナヘイロ）　薄青き色よりも乳上着（ウハギ）に用
いつ川は　木津川　いつミ川ともいふ也
崇神天皇　挑戦（テウセン）所と也
あさはかなる　二月に　初瀬へ参詣（サンケイ）すへし

おいく　浮舟乃作辞
京人　京乃人と云也
天下　あめの下
あつまて　随分（ズイブン）とて合点をせしとなり
物あたさを物　物承（モノウケタマル）中略（リヤク）也
これすんど　あまたと契りせ給人とおきあひのれあまた也
起字
海らしの花さ　尼君（アマキミ）浮舟の母さへなり
のりりのまく　尼の女僧（ニヤウソウ）とかめる也
さもやかなるてはるま
あのれい人　侍従　女房也

ガラス使用

むごし　世称　久しき心なり

あまよりそのとよく　尼へそむきて　萬民めさへよ

くえゆるなり

かれども　姉君（アネキミ）ともなり

宮の御かた　中ノ君入リ也

あまもそれ　八宮の御子まてそうなるまくましるゝ事

世中入リ　其のひ　姉君世中するおもしきるよういひ

よそちやとなり

かんさしのきり　楊貴妃（ヤウキヒ）のかんさしはうりもて御かた

なくなりゐ給ひし事するを

こうハ己て　去年とも己いふ也

うめのはほひ　廿二ヘ萬葉集の時分よりあるなり

かほ鳥の声　此かほ鳥　姉君に似たるのほといひたれ

めにやうく似たる貌（カホ）とや　姉君しハあふて惜伊ひ度（タビ）

とのおもかけみをかくてとも姉君に似たるもあるめ

やま山路を分しとなり

夕されは野辺に鳴なるのかほ鳥のかほにみえつゝ忘られ

なくに　かほ鳥のけなくともなく春の野の草の緑茂

花香もするなれ　春の野に鳴かほ鳥の群れてくる

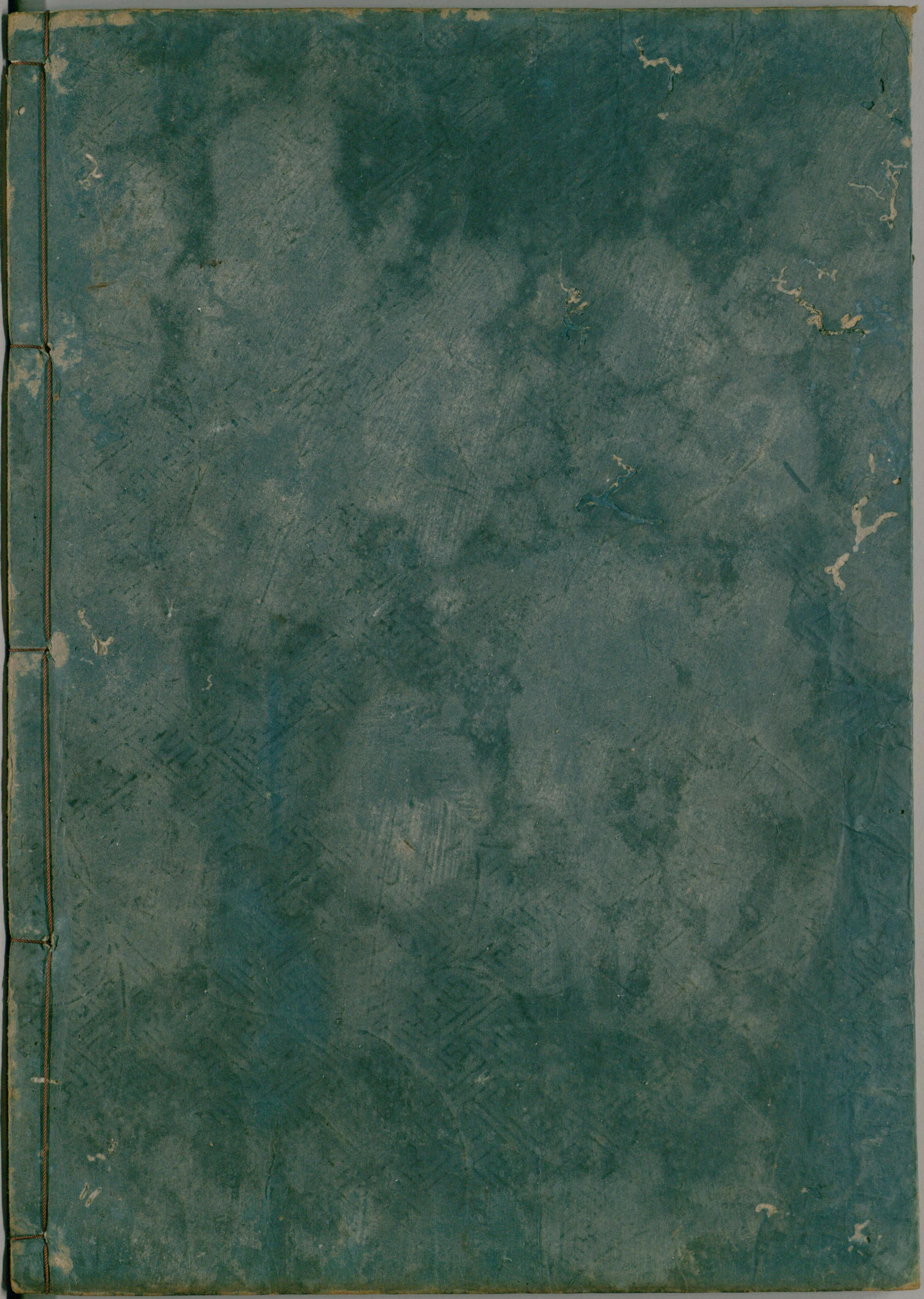
かほハありし人云々之　翡翠（ヒスイ）の事

定家卿　只うつくしき鳥と可心得（ココロヱ）と也

くゝりなり　書留所に　かほよくと出る殊勝（シユセウ）也

857
118

此奉ノ大守ノ所望れそろゝや



ガラス使用